

St. Luke's International University Repository

Changes in Mother's Feelings and Behaviors toward First-Born Child: Focus on before and after the "Welcome, My New Family" Class.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 宏恵, 片岡, 弥恵子, Sudo, Hiroe, Kataoka, Yaeko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014984

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



— 原 著 —

第2子妊娠中から産後にかけての母親の第1子に対する気持ちと かかわりの変化

—新しい家族を迎えるためのクラス 参加前後に焦点をあてて—

須藤 宏 恵¹⁾, 片岡 弥恵子²⁾

抄 録

目的：クラスに参加した母親を対象に、第1子への気持ち及びかかわりに焦点をあて、クラスの前後での変化を記述することである。

方法：現在第2子を妊娠中の母親で、第1子が3歳児の3名を対象とし同意を得て半構成的面接を行った。インタビューは、クラス1週間前、1週間後、2ヶ月後、産後1ヶ月で行った。データ分析は、質的帰納的方法であり、インタビューで得た内容を録音したデータを逐語的に起こし文章化し、それぞれのデータから母親の気持ちを構成する要素を明確にした。

結果：クラスに参加した母親の第1子への気持ちの変化は、【第1子の赤ちゃん返り】、【第1子の第2子に対する反応】、【妊娠・出産プロセスの伝達】、【家族で迎える出産】、【二人の子どもの育児】の5つのテーマについて語られていた。これらのテーマから表された気持ちは、クラスを通じて個別的な変化があった。Aさんは、クラス後第1子が第2子の出産に立ち会うことを大切に考え、立ち会いができる病院を探し出し出産した。また、第1子の赤ちゃん返りの意味を理解することで、第1子の反応に理解を示し受容していった。Bさんは、第1子の第2子受容を促すために真摯に向き合い対応していた。しかし、産後に同時に二人の子どもを育児していくことに対しては、第1子に妊娠前や妊娠中のような対応ができなくなる不安やプレッシャーが持続した。Cさんは、妊娠期早い時期から第1子が第2子を受容できるように働きかけた。また、第1子を疎外しないように第2子の出産に参加できるよう出産前後の環境を整えることで、産後に第1子が第2子を受容できた達成感を味わった。

結論：母親たちは、クラスを通じて解決の糸口をつかむことにより、第1子とのかかわりにおける様々な不安や悩みを軽減させ、第1子とよりよいかかわりを築きながら第2子を迎えられたことが示された。しかし、母親は第2子出産後に、同時に二人の子どもを育児していく新たな不安やプレッシャーを抱くことも分かった。

キーワード：経産婦、きょうだい、家族、両親、出産準備教育

I. はじめに

第1子と夫妻の3人で形成されてきた家族が、新しく第2子を迎えるということは、家族の形態の大きな変化とみなされ、重要な発達課題に位置づけられる。特に母親は、新しく兄姉となる第1子が弟妹を受け入れることを促す役割を期待されているが(Rubin, 1984)、実際には、そのかかわりにおいて様々な心理的葛藤を生じることが報告されている(Brazelton, 1982; Jenkins, 1976)。

欧米では、1980年代から新しい家族を迎えるための

兄弟準備クラス(sibling preparation classes)に関する報告がある(Fortier, et al., 1991; Johnsen, et al., 1985; Wilford, et al., 1986)。クラスは、第1子が第2子を迎える準備を整え、同じ状況の親同士が交流する機会も提供している(Bartlett, et al., 1999)。クラスの評価では、クラス後に母親が子どもとよりうまくかかわれたこと(Fortier, et al., 1991)、母親の入院中の子どもの不安が少ないこと、第1子が第2子との新しい生活に適応でき、ライバル意識が少なかったことが報告されている(Fortier, et al., 1991; Johnsen, et al., 1985)。

受付日 2007年2月2日 受理日 2007年5月8日

1) かみや母と子のクリニック、2) 聖路加看護大学

表1 クラスの概要

	時間	内容	教材
受付		・名札の配布とアンケートへの記入の依頼	
子どものクラス (10:30~11:10)			
担当者の紹介	20分	・担当者の自己紹介と助産師の仕事について説明する。	コーケンベビー (高研)
自分が生まれた時の話		・上の子が生まれたときのお母さんの気持ちは、どのようなものだったのかを伝える。	
生まれてくる赤ちゃん		・子どもたちが交代で実物大の赤ちゃん人形 (男の子・女の子) を抱く。	
赤ちゃんとの身体の違い	15分	①衣類を脱がせながら観察：自分の身体と赤ちゃんの身体の違いに気づかせる (髪・目・耳・鼻・口・歯・首・指・腹・足・臍) ②男の子と女の子の身体の違い (性器) について説明する。 ③おしっこ・うんちの穴・赤ちゃんが通ってくる穴 (女の子) について説明する。	紙芝居『赤ちゃんが生まれるよ』パネル8枚組 (アーニ出版) 塩粒・大豆 いのちの不思議セット・ペープサート (アーニ出版) 胎児モデル「ふうちゃん」 (京都科学) お母さんと赤ちゃん人形 (アーニ出版)
赤ちゃんが生まれるまでのプロセス		①妊娠の成り立ちから出産までのプロセスについて説明する。 ・妊娠の始まり (卵子と精子との受精) について、精子・卵子・受精卵のペープサートを用いる。 ②塩粒、大豆、3ヶ月・5ヶ月・6ヶ月・8ヶ月の胎児モデルで、胎児の発育を説明する。子どもたちは、それぞれのモデルに触れることができる。その際、胎児と胎盤・臍の緒の関係も伝える。 ③人形 (妊婦と赤ちゃん) を用いての劇にて、出産の流れを伝える。	
まとめ	5分	・「誰もが大事にされて育つ・みんなが大事・私も大事・あなたも大事」という内容を伝える。	参加賞 (メダル・シール・お菓子)
親のクラス (11:15~12:00)			
ディスカッション	45分	・①から⑥の内容について説明した後に親とディスカッションを行う。その中で、クラス前アンケート内容の質問に答える。 ①第2子を迎える第1子の心情 ②妊娠中からのきょうだいの受け入れ準備 ③子ども立ち会い出産 ④きょうだい同士のかかわり ⑤赤ちゃん返りへの対応 ⑥性について ・参考図書リストを配布し、説明する。 ・子どもは室内でスタッフと紙芝居・ゲームをして過ごす。	
アンケート記入	5分	クラス終了後アンケート記入後、終了する。	

(中村ら, 2006)

聖路加看護大学看護実践開発研究センターでは、「赤ちゃんがやってくる」(以下クラスと示す)という新しく兄妹になる子どもとその家族を対象としたクラスを実施している(表1)。中村ら(2006)は、クラス前後に行われているアンケート結果から、概ね肯定的な評価が得られたことを報告しているが、クラスによって子どもと家族にどのような変化があったのかに関する詳細な内容は明らかにされなかった。そこで、本研究の目的は、クラスに参加した母親を対象に、第1子への気持ち及びかわりに焦点をあて、クラスの前後、2ヶ月後、産後1ヶ月までの変化を記述することである。本研究の結果は、クラス内容の検討のみならず、この時期の子どもと家族を理解し、新しい家族を迎えるために必要な支援について考えていく上での基礎的な研究になると考える。

II. 研究方法

1. 研究協力者

クラス開催前に参加者リストから研究協力者の条件を満たす者(第2子を妊娠中である母親、第1子が3歳である)を選び、研究の目的及び内容についての説明文と研究への参加・不参加の意思表示の葉書を郵送した。協力の同意が得られた者に電話にて第1回のインタビューの日時を決定した。インタビューを行う前には、研究者から再度口頭と文書で研究の目的及び内容を説明し同意書に署名をもらった。第1子が3歳である母親に研究を依頼したのは、これまでクラスに参加した子どもの平均年齢が3歳であったこと(中村, 2006)、年齢によってクラスに対する反応が異なると考えたからである。

2. データ収集方法

データ収集期間は、2006年7月から12月であった。データ収集は、インタビュー法を用いた。インタビューは、半構成的インタビューガイドを基にクラス参加1週間前、

1週間後、2ヶ月後、産後1ヶ月の前方視的に4回行った。その際、承諾を得て録音を行った。基礎情報は、各回のインタビューの開始前に口頭で質問した。出産後のインタビューは、電話にて出産の状況を把握した後に行った。

3. データ分析方法

データ分析は、質的帰納的方法で行った。まず、インタビューで得た内容を録音したデータを逐語的に起こし文章化した。協力者に文章化したデータの内容についての確認を受け、電話・メールなどで内容の追加を受けた。各々のデータでは、母親が第1子とのかかわりにおいて、どのような気持ちであったか、さらに実際にどのようにかかわっているのかについて、クラスに参加する前後の変化を中心に、熟読し、全体の意味を把握した。それぞれのデータから、母親の気持ちを構成する要素を明確にしていっていった。その後、各構成要素の中心になるものをカテゴリー化した。データ分析は、信頼性と妥当性を確保するために2名の研究者で行い、適宜、母性看護学の専門家にスーパーバイズを受けた。また、インタビューの際は、研究協力者の発言が制限されないことがないよう信頼関係を保つよう努め、どのような意見でも率直に語っていただきたい旨をお願いした。

Ⅲ. 研究協力者への倫理的配慮

研究協力の依頼は口頭と文書で行い、承諾が得られた者にインタビューを行った。研究協力の中断や収集したデータは、本研究以外で使用しないことを保証し、匿名性の確保に留意した。また、研究への参加は自由意志であり、参加・不参加どちらを選択してもクラスに参加する際に不利益がないこと、研究途中及び終了後でも拒否できることを約束した。なお、本研究は聖路加看護大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号06-032）。

表2 協力者の特性

	Aさん	Bさん	Cさん
研究協力者の年齢	30代前半	30代後半	30代前半
職業	専業主婦	専業主婦	事務職
第1子の性別	男児	女児	女児
クラス参加時の第1子の年齢	3歳9ヶ月	3歳6ヶ月	3歳3ヶ月
クラス参加動機	・妊娠・出産の伝え方を知りたい ・子ども立ち会い可能な病院を知りたい ・第1子への対応方法	・自宅出産時の立ち会い準備のため ・第1子への対応方法	・第1子が第2子を受容できる環境を提供したい
第1子に第2子の妊娠を告げた時期	妊娠8～10週頃	妊娠5週頃	妊娠4ヶ月頃
クラスへの父親の参加状況	不参加	参加	参加
出産時の家族参加状況	夫・Kくん	夫・Mちゃん・祖母・妹	夫（Yちゃんは分娩室の外で待機していた）

Ⅳ. 結果

1. 研究協力者の概要

研究協力者は条件を満たした4名のうち研究承諾の得られた母親3名であった。研究協力者の概要を表2に示す。クラスへの参加時期及び初回インタビュー時の母親は、妊娠25～26週であった。面接回数は3～4回で、1回の面接時間は45～90分（平均67.5分）であった。

2. 各テーマからの結果

すべての事例から導き出された共通のテーマは、【第1子の赤ちゃん返り】、【第1子の第2子に対する反応】、【家族で迎える出産】、【妊娠・出産プロセスの伝達】の4つについて、また個別に導き出されたテーマは、【二人の子どもの育児】であった。それぞれのテーマについて、母親の第1子に対する気持ち及びかかわりは、クラス参加前、後、出産後と時間と共に変化していた。気持ち及びかかわりの変化は、個別性が強かったため、それぞれのテーマの中で研究協力者毎に、その特性に注目しながら記述した。[]は、研究協力者の語りから抽出したカテゴリ名を示した。

1) 第1子の赤ちゃん返り

(1) Aさん

妊娠した頃から第1子に対し、「下の子ができるとどう感じるようになるのだろうか」という「赤ちゃん返りへの漠然とした不安」を感じていた。具体的には、「どのように甘えるのか」「どのように赤ちゃん返りが表れてくるのか」という不安が表出された。しかし、クラスの中で「子どもは、今まで独り占めしていた愛情が急に半分になってしまう不安を感じる」という話を聞き、赤ちゃん返りは「手がかかる」というイメージから、子どもが自分に注目してほしいというサインであると理解するようになった。

またクラス参加1週間後には、クラスで赤ちゃん返りは特別なことではないことを知ったことで、「楽になっ

た」と感じられ、Kくんが赤ちゃん返りを示しても「受け入れていけそう」と「赤ちゃん返りへの不安の軽減」を表す言葉が聞かれるようになった。

出産直後からKくんは、夜泣き、ぐずる、ご飯を食べさせて欲しい、おっぱいを飲みたい等の赤ちゃん返りが表れた。産後1ヶ月では、Kくんの反応に、「上のお兄ちゃんの悩みばかり」と言いつつも、「お世話を焼いてほしいみたい」と捉え、なんとか「赤ちゃん返りに対応できる」自分を感じていた。そして、Kくんに本を読んで聞かせたり、散歩に行ったりして、二人だけの時間を作るように心がけていた。

「実際下の子ができると、上の子がどういう感じになるのだろうかと思っていた。上の子への対応の仕方のお話が聞けたらうれしい。赤ちゃん返りっていうもの自体が分からない。甘えたりするのは分かっているけど、どんな風に甘えるのかなと思って。」(クラス参加前)

「“赤ちゃん返りをしたら受け入れてあげて下さい”という話があったので、ちょっと楽になったんです。“赤ちゃん返りは、特別なことじゃない。逆にそれをちゃんと表現してくれないと、後が大変になる”っていうことを伺って、ほっとした。すごく甘えん坊になるとか、手がかかるようになるというイメージだったんですけど。“子どもも我慢してるから、その分、優しくしてあげて”と言われ、そうしようかなと思って。」(クラス参加1週間後)

「悩みは上のお兄ちゃんのことばかり。ぐずったりとか、“着させて”、“はかせて”とか、“ご飯食べさせて”とか。お世話を焼いてほしいみたいです。でも“だめよ”って言ったりせず、極力つきあってます。“お兄ちゃんにもおっぱい飲ませていいよ”とクラスで言われたので。パパやおばあちゃんが“おかしいからやめなさい”なんて言うんですけど、私は“いいよ”と。そうすると、すごく満足した顔になる。寝る前も一緒に本読んであげたりして、極力二人っきりで過ごせるようにしている。」(産後1ヶ月)

(2) Bさん

妊娠4、5ヶ月のお腹がでてきた頃に、MちゃんはBさんから離れられなくなるという行動が見られた。Mちゃんが甘えて離れない性格であることから「何らかの赤ちゃん返りが起こるのではないかと」予測していた。そのため、自分から離れられないMちゃんの反応を赤ちゃん返りであると捉え、「分離不安に対する受容」ができていた。

妊娠後期に、予測どおりMちゃんは赤ちゃんの真似をするようになり、赤ちゃん返りを示すMちゃんにBさんはストレスを感じていた。しかし、クラスでの“赤ちゃん返りがあることは当たり前”“時間と共になくなる”という言葉が支えとなり、クラス参加2ヶ月後には

「赤ちゃん返りへの見通しがついた安堵感」がもてるようになった。そして、実際に前向きな気持ちで対応していた。

しかし産後1週間、誕生した第2子と別室で臥床していた頃、Mちゃんはひどいやんちゃを表した。Bさんは、赤ちゃんごっこの要求、お乳を飲みたがる、おむつをしたがるなどの赤ちゃん返りに対して、「覚悟していたし、ひどくなっても気にしないでいよう」と思っていた。しかし、Mちゃんの反応は予想外であり、自分が対応できる範囲を超えていると感じ、「過度なやんちゃに対する困惑」を表した。Bさんは、産後夫が帰京したら一人でやんちゃなMちゃんに対応できるのか不安で泣きたい気持ちを抱きながら過ごした。そしてBさんは、やんちゃなMちゃんを叱ることが当たり前になっていると感じ、知らず知らずの間に対応が厳しくなっていく自分を反省し、叱らずに言い聞かせるような対応をするように心がけるようになった。

「ママから離れることができるようになっていたんですけど、私がいなくてだめで。…遅かれ早かれ、この子には赤ちゃん返りが出てくるとは思っていました。だから、特に動揺することはなかったですね。来たなって感じかな。」(クラス参加前)

「クラスに行ってよかったと思うのは、助産師さんが“それがあるのが当たり前だから”と言ったこと。確実に何かあるとは思っていたし、覚悟はしていた。それでも(赤ちゃん返りが)あったら、どれくらい私がストレスを感じるかっていうことが未知の世界だった。でも助産師さんの“気にしないでいいのよ”とか“時間と共になくなる”っていう話を聞いて気持ちが楽になった。その一言をかなり信じていました。」(クラス参加2ヶ月後)

「旦那が帰る2日前くらいが一番やんちゃだった。夫とスーパーに出かけて、がちゃがちゃ(おもちゃ)を“やらせて”と言ったけど、やらせなかった。そしたらすごく泣いて、もうとまらなくて。それから、Mちゃんは、網戸を突き破ったんですよ。今までそんなテンションになることはなくて。私、旦那がいなくなったら一人でできるかなと思って、半泣きになっていたんです。」(産後1ヶ月)

「Mもいつも素直に聞けるときばかりでないから、すぐにぎゃーと泣き始めるので、私はブチっときれて叱ってしまうことも。叱り始めるとそれが当たり前になる。自分でも分からないうちに厳しくなっていたかもしれない。それから、怒らずにMに言い聞かせるように心がけています。」(産後1ヶ月)

2) 第1子の第2子に対する反応

(1) Aさん

Kくんは、母親学級の沐浴指導で、自分で赤ちゃん人

形を沐浴しようとする積極的な態度がみられた。Aさんは、Kくんが小さい子に興味を示すことをほほえましく思う一方で、産後の育児を想像するとKくんが第2子に世話を焼くのを煩わしいと感じ、[第2子への積極的な世話欲求に対する喜びと煩わしさ]を同時に抱いていた。

その後クラス参加時にも、赤ちゃん人形に興味を示すKくんの様子に再度喜びを感じた。そして「下の子を触らせて慣れさせようと思う」と語り、クラス前に抱いていたKくんの第2子の世話欲求に対する煩わしい気持ちから、[第2子への世話欲求に対する理解]へと変化し、Kくんに向き合っていこうとする言動が見られるようになった。

「すごい世話を焼きたがっている様子なので、あんまり焼かれても大変だろうなと思ったり。子どもが妹や弟ができることを喜んでいるので、それがすごくよかったですね。沐浴指導のときは“俺が入れるんだ”と言って、赤ちゃんを取り上げようとして。お世話したがって。まあ、どうなるか分からないですけど、積極的ですね。」(クラス参加1週間前)

「うれしかったり、楽しみにしてくれているんだと思って。(クラスの時)赤ちゃんの人形がずいぶんいじめられていたので、“大丈夫かな”と思っていたんですけど。下の子にできるだけ触れさせて、慣れさせるため、努力しようと思いました。」(クラス参加1週間後)

「小さい子に優しくするんですよ。一生懸命世話焼いたりして。昨日スリングの講習会で、違うお母さんの赤ちゃんのうんちを一生懸命拭いていて。妹が生まれたら触りたい放題で目が離せず大変そう。でも、クラスで上の子の役割についてのお話を伺い、“(第2子から)遠ざけるより赤ちゃんへの接し方を教えて積極的にお手伝いしてもらったほうがよい”と聞いたので、色々お手伝いを頼もうと思いました。」(クラス参加2ヶ月後)

(2) Bさん

Bさんは、Mちゃんにとって第2子を家族に迎えるということは、うれしいことばかりではないと思い、第2子を受容できるかどうか心配していた。そのため、第2子を妊娠してからは、Mちゃんがいないと困るという内容のお話を作り聞かせたり、Mちゃんの前ではお腹の第2子に声をかけたりする姿は見せないようにするなどの[第2子受容に対する配慮]をしていた。クラスでの話の中で、自分のMちゃんへの対応を保証されたことで、クラス参加後には「今までの接し方を保証された自信」をもつようになった。その後も、Mちゃんが第2子のことを話題にしたりしなかったりする反応を、第2子を受け入れていく複雑な心境にあると捉え、Mちゃんが自然に第2子を受け入れていくのを見守ってい

くようにしていた。産後には、Mちゃんが第2子に興味を示し世話をする姿が見られたことにより「第2子を受容できている確かさ」を感じられた。

「夜寝るときにお話をして寝るんですよ。お腹に赤ちゃんができた頃からは、赤ちゃんとMちゃんとのストーリーを創って、“赤ちゃんは、お姉ちゃんが大好きなの。赤ちゃんは、お姉ちゃんと一緒に遊びたいの。お姉ちゃんがいないとだめなの”という話をしています。」(クラス参加前)

「この子に対しては今までどおりの接し方でいいと思う。」(クラス参加1週間後)

「実はそんなにがらっと変わったと思うことはないかな。でもその夜、“赤ちゃんの話をして”って言われた。日頃、M自身は、“赤ちゃん、赤ちゃん”って自分から言うことはない。それに対してこちらからも言うことはなくて。」(クラス参加1週間後)

「(産後)2週間くらいたってからお姉ちゃんになってきたなっていうか、多少ね。もっとそうなれるようにと思っています。おむつ交換の手伝いなんかは…たまにですけど。」(産後1ヶ月)

(3) Cさん

妊娠当初、Yちゃんには、第2子の話は何となく耳を塞ぎ、第2子に興味を示したくないようなしぐさが伺えた。このようなYちゃんの反応に対してCさんは、当然であると感じ、[第2子受容を拒むYちゃんへの同情と懸念]を示していた。しかしCさんは、そう思う一方で、このままで出産を迎えてはいけないと感じており、Yちゃんが第2子をスムーズに受容できるようなかかわりが必要であると感じていた。Yちゃんは、クラス中で赤ちゃん人形になかなか触ろうとはしなかったが、スタッフが人形を渡すと関心を示す場面も見られた。しかし、クラス直後からYちゃんは立ち寄ったデパートの赤ちゃん人形に興味を示し、クラスの復習をする姿が見られた。そして、徐々に赤ちゃんという存在を拒否する反応がなくなっていき、妊娠・出産に関する本に興味を示すような仕草が見られるようになった。このような反応を見せるYちゃんにCさんは「第2子受容に対する安堵感」をもった。

産後、Yちゃんは、いここに“私の弟”だと自慢したり、積極的におむつ替えを手伝ったり、第2子に興味を示すような言動が多く見られた。このように肯定的に第2子に接するYちゃんの反応にCさんは安堵の気持ちを表し、Yちゃんの「第2子受容に対する手ごたえ」を感じていた。また、夫と二人で一度に第2子に構うことがないように配慮し、Yちゃんと一緒に過ごす時間を作るようにしていた。

「私は、上の子が心地よく下の子を受け入れられる環境を与えてあげたかった。デリケートな時期なんですよ。ちょっとずつ話はしているんですけど、耳を塞ぐような感じなんですよ。生まれてから私と主人の間にいつもある両手がなくなるわけだから、ショックだと思う。」(クラス参加前)

「クラスの後に一緒に銀座のデパートに行ったんですね。そして、マタニティーのところに赤ちゃんのお人形があって、そのお人形のおむつをはずしておちんちんがあるか見ていたんです。クラスから一週間ぐらい後かな、赤ちゃんという存在が何となく分かってきたみたいで。妊娠・出産に関する本を寝る前に一緒に見るようになりました。」(クラス参加2ヶ月後)

「うれしいですね。変にならなくてよかった。クラスに行ったのがよかったです。(Yちゃんは)おむつ替えたりしてます。私も、夫も二人一緒に第2子の方に行かないようにしています。寝ている時間はYだけを見るようにしています。上の子は、何か言葉一つ間違っただけを言ってもぐさっとくる年頃だから。」(産後1ヶ月)

3) 家族で迎える出産

(1) Aさん

Aさんは、出産の場にKくんがいないことへの違和感があり、今回「子ども立ち会い出産の希望」があった。また、Kくんが第2子をスムーズに受容できるように「第2子を一緒に迎えたい」と考えていた。クラスでの会話から、子どもが立ち会うことができる病院があることを知った。劇の出産シーンでは、Kくんが妊婦人形の背中をなで、いたわる姿を見てうれしかったと表した。また、クラス参加後には、Kくんから“出産の場に一緒にいたい”“応援したい”という発言が聞かれたことから、「子ども立ち会い出産に対する意欲」が表され、子ども立ち会い出産を実現した。立ち会い出産後に第2子を抱っこしたときのKくんのうれしそうな表情、立ち会いしてよかったと笑顔で話したことで、そして産後に第2子を可愛がっている様子から、Kくんが第2子を可愛がっていることを実感し、「子ども立ち会い出産ができた満足感」を表出した。

「子どもと一緒に立ち会いができるといいなと思い、(クラスに)参加してみることにしました。子どもだけ(第2子に)会わせないのはどうかなと思っていたので。(まだ)小さいので、時間が合えば一緒に迎えられたらと思っています。一緒にいた方が家族の一員として受け入れやすい。」(クラス参加前)

「赤ちゃんが生まれてくるシーンで、Kくんは(人形の背中を)なでなでしていたので、子ども心にも感じるものがあつたんじゃないかなと思って見ていました。…うれしかったですね。

“赤ちゃんが生まれるときに一緒にいたい、がんばれ、がんばれしてあげたい”と言ってくれたので、私も子どもが立ち会える病院を探してみようと思いました。」(クラス参加1週間後)

「お産のとき、子どもは落ち着いていて“お母さん、がんばれ”と言ってくれていました。“手を握って”とお願いしたら、握ってくれていました。Kくんが生まれたばかりの妹を初めて抱っこしたとき、とても嬉しそうで、いい顔をしていたこと、立ち会いをして“よかった”と笑顔で言ってくれたこと。何より、一番長男が妹を可愛がってくれることがうれしい。」(産後1ヶ月後)

(2) Cさん

クラス前からCさんは、無事に生まれればそれだけでよいということではなく、「家族で出産を共有したい」と考えていた。そして、クラス参加後にはその気持ちを強くし、「第2子を一緒に迎えたい思いの高まり」を表出した。しかし、出産する病院では子ども立ち会い出産はできないことが分かったため、出産前後はYちゃんときできるだけ共に過ごし、第2子誕生後にはすぐに会わせたいと考えるようになった。産後Cさんは、Yちゃんがクラスで学び、Cさんと夫が親のクラスで話を聞くことで、家族で迎える出産を真剣に考える機会になったと感じた。そして家族で出産を迎えることが大切であるということを夫が受け入れ、家族皆で迎えられた出産に「第2子を一緒に迎えられた達成感」を味わった。

「私が一人で産んでということにはしたくない。皆で迎え入れたい。一人目のときは、私も主人と同じで生まれてくれればそれでいい、とりあえず生まれてくれればと思ったんですけど、今はみんなで共有したい。Yを除外的なことはしたくない、嫌な思い出にしたくない。」(クラス参加前)

「私はクラスの前から、できればYを立ち会わせたいと思っていました。…夫は、私が伝えるよりクラスで専門家から聞く方が理解できたみたいで。(夫は)娘は実家に預けてしまったほうがいいと思ってたようですが、子どもにとっても(大切な)意味合いがあるということをクラスで聞いて“納得した”と。」(クラス参加2ヶ月後)

「クラス自体がってことじゃないんだけど、火種になった。産めばいいということじゃないって考え直すというか、家族の考えが共通になったというか。」(産後1ヶ月)

4) 妊娠・出産プロセスの伝達

(1) Aさん

Kくんには、妊婦健診に一緒に行った際にお腹の第2子に興味を示し、“赤ちゃんどのくらい”と口癖のように質問する様子が見られていた。そのため妊娠・出産に

関する本などを参考にしながら、Aさんなりの方法で第2子を妊娠したことや妊娠の経過を伝えていた。しかし、具体的な内容になるとどのように話したらよいのか分からず「妊娠・出産の伝え方に対する戸惑い」を感じていた。しかしクラスで、胎児モデルでその大きさが示されたことで、Kくんもお腹の胎児がイメージできるようになったと感じられた。またクラスの際、以前からAさんなりの方法でKくんに教えていた妊娠の内容が正しかったことを実感できたこともAさんの自信につながっていった。そして、Kくんに胎児の話をする際に「赤ちゃんの成長を正しく伝えられる実感」をもつようになった。さらにクラスで、子どもは大人のもつ性の知識の全てを求めていることを知ることで安心感を得ていた。

「(妊婦健診の時には)“赤ちゃんの様子見るからね”と話していますね。いつも終わると、“赤ちゃんどれくらい”って聞くのが口癖で。子どもができたということを、どんなふうに話せばいいのか。また、大きくなってくるお腹をどういうふうに説明したらいいのかなと思って。生まれるということを、分かる範囲で理解してもらえたらと。」(クラス参加前)

「今、赤ちゃんどのくらい”ってよく聞いてくる。その時、赤ちゃんの大きさをイメージしやすいように話せる。実際に実物のお人形を見せて話して下さったので、具体的に子どもの中のイメージとしてはできたのかな。方法としては、(自分の)やっていることが間違っていなかったと思って。親が子どもに話をするときに、このくらいの話でいいんだと分かった。あまり片意地張らずに話せばいいんだなって。」(クラス参加1週間後)

(2) Cさん

Yちゃんに対して、妊娠・出産に関する本を見せて「お腹に赤ちゃんいるんだよ」と自分なりの方法で説明はしていたが、実際には「妊娠・出産の伝え方に対する戸惑い」を感じていた。クラス2ヶ月後には、Yちゃんが子どもクラスの内容についてよく覚えていたこと、またクラスの内容と妊娠に関する本に書いてある内容やイラストが結びつき、妊娠・出産の大まかなプロセスについて理解できているような発言があったことから、「Yちゃんの学びに対する成功感」をもった。妊娠・出産についてのクラスの内容が、婉曲な言い回しをせずに伝えていたため、Yちゃん理解につながったと感じていた。

「妊娠に関する本などを見せて、“お腹に赤ちゃんいるんだよ”なんて説明したんですけどね。親の私たちでも分からないのに、子どもにどう伝えたらいいのか分からない。」(クラス参加前)

「事実や名詞を変えることなく、子どもっぽく言うのでもなく、

そのままだったの。こういうふうに言う子どもにも伝わるんだと。すごい良かったです。ここの部分が伝わって欲しいと思った部分が伝わった。胎盤のついたお人形をよく覚えているみたいで。妊娠の雑誌で胎盤を見ると、“あの部分だったね”と言ったりして。ちょっとずつ赤ちゃんが大きくなっていくとか、大きくなったら外に出るとか。そういうことが、絵本とか写真でつながっていったのかな。」(クラス参加2ヶ月後)

5) 二人の子どもの育児

(1) Bさん

妊娠前から妊娠中にかけて、Mちゃんに愛情の言葉かけを頻回に行い、Mちゃんを大切に思う気持ちを伝えていた。しかし妊娠中期頃からは、産後に自分が気づかないうちに第2子の世話に追われMちゃんへの対応にゆとりを失ってしまうことに不安を抱き、「二人の育児に対するプレッシャー」も感じていた。クラス参加1週間後には、親のクラスの様々な話を聞くことによりクラス参加前に感じていた不安やプレッシャーは、クラス前よりも楽な気持ちで育児を捉えられる気持ちが芽生えていた。しかし妊娠後期になると、クラス参加前と同じように「二人の育児に対するプレッシャーの再現」を表出するようになった。また、Mちゃんが姉になろうとしている姿に愛おしさを抱き、同時にMちゃんに寂しい気持ちを抱かせることに対する辛さを感じるようになった。

「今は、Mちゃんに対して“可愛い”“大好き”って、いっぱい言っただけで、それを二人に言えるかな。こっち(第2子)のことをやっていると、“可愛い”、“大好き”って言わなくなる自分があるんじゃないかと思うことが心配。それが一番気になる。Mが“私を大好きだって言ってくれていたのに、お母さん最近言わないな”っていうことを感じるんじゃないかな。」(クラス参加前)

「助産師さんの話はとても印象に残った。安心して出産に臨めるかな。二人を育てなくちゃいけないって、どこかでプレッシャーがあるけど。そんなに考えなくてもいいのかな、どうにかなるという感じ。」(クラス参加1週間後)

「少しずつMがお姉ちゃんになるんだ、みたいな気持ちを切実に感じているのかもしれないと思うときがあって、たまに愛おしい。寂しいと思わせることが辛いかな。自宅に帰ったら、家のこともしなくちゃいけない、ちびもMもいる状況で、私はどこまでそれができるかな、っていうことが辛いし心配。」(クラス参加2ヶ月後)

V. 考察

本研究において3名の研究協力者は、クラス前後、そして出産に至るまで個別的な変化の過程を経ていた。しかし、クラスへの参加を希望し、同時期に同じ内容のクラスに参加したという点では一致しており、結果から以下の共通点、個別点が見いだされた。

1. 第2子を迎える第1子の反応に対する理解と対応

本研究にてA、Bさんは、第2子妊娠中に、第1子の赤ちゃん返りに漠然とした不安をもっており、Cさんは第1子の第2子への反応に懸念を示していた。この結果は、これまでの調査（南部, 1994; 都筑他, 2001）で、経産婦の悩みは第1子に関することが多いことに裏付けられる。クラスでは、赤ちゃん返りは当たり前の反応であること、その反応はいつまでも続かないこと、また赤ちゃん返りの意味や理由を説明している（中村他, 2006）。3事例ともに、クラス後には第1子の赤ちゃん返りや否定的な反応を受け入れ、第1子とのかかわりを自信へと変化させていくプロセスが認められた。しかし産後は、第1子の赤ちゃん返りの反応が予想外であり困惑することがあることもBさんの体験からわかった。これまでこのクラスは1回のみの実施であったが、Bさんの事例から継続的な支援やフォローアップの必要性が示唆された。

また、母親にとって第1子が第2子を受容できることは大きな心配事であった。Fortierら（1991）やJohnsenら（1985）の結果と同様に、本研究結果からも子どもがクラスに参加することにより、第1子は第2子との新しい生活に適応しやすく、第2子の受け入れがよいことがわかった。母親たちは、クラスへの参加を通じて子どもの反応を理解して対応することで、第1子とのかかわりがよりスムーズになり、かかわり方に自信をもてるようになることが示された。母親が第1子の示す反応を理解でき、母親が第1子とのかかわりに自信をもち対応することができれば、第1子は精神的に安定し赤ちゃん返りがいつまでも継続しない一因になると推測される。

そして本研究では、第1子はクラス参加後から産後にかけてネガティブな反応を示すことなく、産後には第2子をスムーズに受容し、興味を示していた。この結果は先行研究で示された第1子の第2子へのネガティブな反応（Gullicks, *et al.*, 1993; 保田, 2004）とは異なっていた。3事例と限られた本研究結果ではあるが、クラスは第1子に第2子を迎える心の準備をしていく上での肯定的な効果を促していると考えられる。

さらにBさんの結果からは、クラスへの参加により自分の第1子への対応や育児が保証され、自信を高めていく過程が認められた。大久保（1996）は、親になって

いく人にとっては自分の解釈に基づく当たり前の行為が、第3者によって保証されることが重要であると述べている。クラスはBさんが自分の育児に自信をもてるようなかわりの一端を担うことができたと考える。さらにクラスが実践を重視した体験型であることで、母親が第1子の赤ちゃんに対する反応を実感でき、出産後に第1子が第2子に対して接するイメージを妊娠中にもつことができるよい機会となることも分かった。

2. 家族で迎える出産への支援

近年子ども立ち会い出産に関する報告もあるが、子どもが出産に立ち会う際、妊娠中から立ち会うための準備をすることで、肯定的な反応が伺えるとの報告がある（Daniels, 1983; Parma, 1979）。A、Cさんは、第2子出産が第1子にとって大切な出来事になると考えていた。第2子出産へのプロセスを第1子と大切にかかわることにより、第1子は妊娠中から第2子に対する受容が見られ、産後には第2子への興味が示された。妊娠中から家族で第2子を迎える準備を整え第1子と共に出産を迎えることは、産後の第1子の第2子に対する肯定的な反応を示すことだけでなく、母親にとっても第1子の成長を感じることができる機会になるとも考えられる。

3. 妊娠・出産のプロセス及び性について伝えることへの構え

妊娠成り立ちや出産のプロセスを伝えることは、性教育の第一歩と位置づけられる。性教育は、親たちから、大切なことという認識はあるがどのように教えたらいのか分からないという声が多い（桑原他, 2004; 依田, 1979）。本研究のA、Cさんも同様に、性教育の大切さを認識していたが伝え方に自信がもてなかったと語っていた。クラスでは、安藤（2004）が述べているように、性について率直に話すことを重視し、婉曲な言い回しは正しい理解の障壁になるとの考えを基盤に、子どもたちに伝える言葉を吟味し、内容を精選してきた。不安をもっていた2事例は、クラスに参加することで、子どもたちに妊娠・出産・性の知識を正しく伝え、親が今後どのように子どもに伝えればよいかを学ぶことができ、出産・性に対する構えがなくなっていく姿が認められた。この結果から、実際に親も子どもと共にスタッフが妊娠・出産・性について子どもにどのように教えているのかを見ることができるクラスの形態は、親が子どもに性について伝えていく導入の機会となり、教育のモデルになったと考えられる。

4. 二人の子どもの育児を行う母親への支援

金岡ら（2002）の調査で、育児に対する否定的感情の認知は経産婦が他の群に比べて有意に高いことが示されている。この理由の一つとして、当該乳幼児と共に第1子にも同時育児が必要となる場合の育児負担増という可

能性が考えられると述べている。Bさんも同様に、平日仕事で帰りの遅い夫からの育児サポートは得られにくく、産後に二人の育児をすることで、第1子へのかかわりにゆとりがもてなくなるのではないかという不安を抱いていたため、二人の子どもを育児することへのプレッシャーが大きかったことが伺える。第1子とその家族は産後1ヶ月までは不安定な時期を過ごす、産後3ヶ月過ぎる頃から落ち着き、産後6ヶ月には安定期に入る(大月他, 2002; 山崎, 2003)。家族の不安定な時期が時間と共に軽減するという見通しがつくことは、二人の子どもの育児に対するプレッシャーの軽減につながると考える。しかしこのクラスは、妊婦とその家族を対象としており、産後の育児のイメージがつきにくいこととも考えられる。今後クラスでは、産後のフォローアップクラスの実施も検討していく必要があるだろう。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究は、第1子の年齢が3歳児の母親を対象にしたため、母親の気持ちやかかわりの変化は3歳児の特性の影響が大きかったと考えられる。研究協力者は、第1子とのかかわりへの関心が高く、自主的にクラスの参加を希望した母親であり、さらに協力者が3名と少ないことから、本結果の一般化には限界がある。本研究は、母親の第1子とのかかわりに焦点化した、子ども自身の気持ちの変化、他の家族成員の視点、家族の発達といった長期的な視野からの分析を行っていくことで、今後クラスの影響または効果を明らかにできると考えられる。

本論文は、2006年度聖路加看護大学大学院課題研究の一部を加筆修正したものです。

引用文献

安藤由紀(2004). 就学前の子どもへの性教育-性と人権。性教育実践。15. 144-155.

Bartlett, L. & McGrath, J.M. (1999). Children's responses to the birth of a sibling: Interventions to assist the family in transition. *Mother Baby J.* 4(4). 19-25.

Brazelton, T. B., 小林登訳(1982). ブラゼルトンの親と子のきずな-アタッチメントを育てるとは。医歯薬出版。

Daniels, M. B. (1983). The birth experience for the

sibling. *J Nurse Midwifery.* 28(5). 15-22.

Fortier, J. C., et al. (1991). Adjustment to a newborn, Sibling preparation makes a difference. *J Obstet Gynecol Neonatal Nurs.* 20(1). 73-79.

Gullicks, J. N. & Crese, S.J. (1993). Sibling behavior with a newborn: Parent's expectations and observations. *J Obstet Gynecol Neonatal Nurs.* 22(5). 438-444.

Jenkins, P. W. (1976). Conflicts of a secundigravida. *Matern Child Nurs J.* 5(2). 117-126.

Johnsen, N. M. & Gaspard, M. E. (1985). Theoretical foundations of prepared sibling class. *J Obstet Gynecol Neonatal Nurs.* 14(3). 237-242.

金岡緑, 藤田大輔(2002). 厚生省の指標。49(6). 22-30.

桑原明日子, 原谷律代(2004). 保育園年長児への性教育を行って。助産雑誌。58(7). 640-643.

中村紋子, 他(2006). 新しく兄姉になる子どもと家族のクラス「赤ちゃんがやってくる」の実施と評価。日本助産学会誌。20(2). 85-93.

南部春生(1994). 経産婦のもつ育児不安。周産期医学。24(5). 618-623.

大久保功子(1996). 初めての子供を持った夫婦の出産後3ヵ月間の経験世界-親になること(1)。神戸大学医学部保健学科紀要。12. 85-93.

大月恵美子, 森恵美(2002). 第2子出生に伴う家族の適応過程。日本母性看護学会誌。2(2). 31-40.

Parma, S. (1979). A family centered event?. Preparing the child for sharing in the experience of childbirth. *J Nurse Midwifery.* 24(3). 5-10.

Rubin, R. (1984). Maternal identity and the maternal experience. 新道幸恵, 後藤桂子訳(1997). ルヴァ・ルービン母性論。母性の主観的体験。医学書院。

都筑千景, 金川克子(2001). 出産後から産後4ヶ月までの子をもつ母親に生じた育児上の不安とその解決方法-第1子の母親と第2子以上の母親における比較-。日本地域看護学会誌。3(1). 193-198.

Wilford, B. & Andrews, C. (1986). Sibling preparation classes for preschool children. *Matern Child Nurs J.* 15(3). 171-185.

山崎あけみ(2003). 3歳になる第1子を気遣いながら4人家族を形成するプロセス。日本助産学会誌。17(1). 35-46.

依田明(1979). 3歳児。朱鷺書房。

Changes in Mother's Feelings and Behaviors toward First-Born Child : Focus on before and after the "Welcome, My New Family" Class

Hiroe Sutou

(Kamiya Mother and Child Clinic)

Yaeko Kataoka

(St Luke's College of Nursing)

Purpose: The purpose of this study was to describe expectant mothers' feelings and concerns about their first-born child before and after participating in the "Welcome, My New Family" class.

Method: Three pregnant mothers, each with a 3 year-old first-born child, gave their consent to participate in this study. Data were collected using semi-structured interviews. Interviews were done a week before the class, a week after the class, two months after the class, and one month after childbirth.

Results: Participants experienced changes in their feelings. Their feelings were described along following five topics: "regression by the first-born child", "reactions of the first-born child to second-born child", "processes of pregnancy/delivery", "presence of family members at delivery", "child care for two children". Mother A searched for the maternity hospital that allowed her first-born child to be present at delivery because she had thought it was important for the child. She developed more understanding about bringing the new baby home. Mother B, although she faced the future calmly and could cope with her first-born child, felt anxiety and pressure in continuing one-to-one care for her first-born child after birth of her second child. Mother C was confident that her first-born child would accept the new baby positively; as she let her first child spend a lot of time with her during her pregnancy.

Conclusion: The results suggest that mothers developed greater awareness and reduced various anxieties and concerns about child-care through the class, and learned to maintain a good relationship with their first-born child. However, mothers continued to feel pressure and have anxiety focused on caring for two children at the same time.

Keywords: multipara, siblings, family, parent, childbirth education